見えないもの・見ているはずのもの・見えそうなもの

桐生渚

馬喰町にある KOKI ARTS にて展覧会「Intervals: Distance」が開催されている。この展覧会は東京の KOKI ARTS、大阪の TEZUKAYAMA GALLERY、ソウルの Gallery Chosun による抽象絵画をテーマとしたコラボレーション展であり、同作家の別作品にて 3 都市を巡回する。各ギャラリーのディレクターがそれぞれの展示のテーマを設定する。KOKI ARTS での展示はその初回の展覧会に当たり、テーマは「Distance」。

今回セレクトされた松本奈央子、和田直祐、アン・サンフンの 3 名は国籍や経歴だけでなく、マテリアルや表現においても全く異なるアーティストであるが、三者の間には、絵画を通して鑑賞者が感じる経験という点において、意図せぬつながりがあるように思えた。

KOKI ARTS 所属である松本奈央子はすみれを主題にした作品で知られる。出品作品のタイトルは全て同じ「Violet」だ。しかしこのシリーズには、いわゆる我々がイメージするすみれの要素はほとんどなく、一度見ただけではすみれはおろか、花を描いているかどうかさえわからない。また使用されている色も白や黒、ベージュやグレーといった彩度の低い色に限定され、絵の中の「形」はまるで小鳥や昆虫のようで、植物というよりもどこか可愛らしい生き物のようにも見える。

例えば、展示の中で一番大きな作品である《Violet》ではキャンバスの地の色とほぼ同色の淡いベージュを背景に白い形が浮かび上がっている。その形の中央にある二つの点は目のようにも見え、この形を生き物と思わせる要因にもなっている。ぼやけた輪郭や、背後に置かれた影のようなグレーの色面は形にうっすらとした立体感を与え、この形が単なる模様ではなく何かしらの「存在」であることを印象付ける。また、長谷川等伯の水墨画を彷彿とさせるような大胆な余白を使った構成の巧みさが、画面に軽やかさをもたらしている。

作家が「すみれは描き進めるときの設定としてある」と語るように[i]、このシリーズの作品はすみれを出発点としながらも、それに付随する清廉で素直なイメージや、ジョージア・オキーフに見られるような女性性や豊穣といったイメージは感じられない。[ii]

むしろ、作品は松本による精密な花の観察を通じて、その形状や色彩の面白さを発見することから始まっており、このことが作品を抽象へと導いている要因といえよう。

そして作品を前にすると、鑑賞者は「何を見ているのか」と自問せずにはいられない。目の前には不思議な白い形があり、大胆な余白は想像力を掻き立てる。しかし手がかりを求めて「Violet」というタイトルに目を向ても、目の前の形と「すみれ」という言葉がどうしても結びつかないことに気づく。

松本奈央子 《Violet》

そうしてタイトルと描かれているものとの矛盾した関係性に引き込まれると同時に、描かれているものと描かれていない、「見えないもの」ものとの絶妙なバランスが、作品に多層的な要素を生み出している。

大阪の TEZUKAYAMA GALLERY の作家である和田直祐の作品もまた、新しい試みの中で鑑賞者が「見ている（はずの）もの」への意識を促す。彼の代表的なシリーズでは、「グレージング」と呼ばれる古典的技法が使用され、何度も絵の具を塗り重ねることで生まれる、ガラスのような透け感のある画面が特徴だ。見る者はその不思議な奥行きに目を向け、見れば見るほど、二次元的であるはずの画面の奥に引き込まれるような感覚を覚える。

しかし出品作品の《Elektroda #2》や《Cathode と Anode》は他の作品と同じように静謐で内省的な雰囲気を保ちながらも、そこに描かれているモチーフによって彼自身の作品と鑑賞者の態度を静かに皮肉っているように見える。

グラデーションのかかった青と白のストライプで構成されているこれらの作品からは一見すると前述したような代表的な作品と同様、画面に引き込まれるような印象を覚える。しかし中央の白い領域はざらついており、他の作品のようなフラットな画面の中にある奥行きも感じられない。

というのも、この白い領域は、作家自身の青い作品を二つ並べて壁にかけた時の、作品と作品の間にある展示空間の白い壁を描いているのだ。確かにスペースを見渡してみると、《A graph #56》、《A graph #57》と題された青を基調とした作品が二つ並んでいる。

通常、展覧会において空間の壁は主張しない、「見なくてもよい」ものだ。展示では当然作品が主役であるため、多くのギャラリーの壁は白く、個性を極力減らしたホワイトキューブのスペースが主流である。

しかし和田の作品はこのような展示空間の本来の意図を易々と飛び越える。確かに私たちは絵を見ているとき、壁も同時に見ているはずだ。厳密には目には映っているが「見てはいない」。それは当たり前のことであり、通常なら何の問題もない。しかし、和田の作品は鑑賞者を自身の絵の中に引き込みながらも、その周辺、つまり展示空間へと目を向けさせるように我々を突き放しもする。真ん中の薄い水色の色面は、作品の青がかすかに壁に反射している様子とも見えるし、一口に「白壁」と言っても、影や作品の反射、自然光などによって決して一様ではないことを比喩しているようにも思える。

結果として、彼の作品は絵画の物質性を、それが掛けられる壁や展示空間全体にまで拡張しようとする試みとして捉えられると同時に、作品と展示空間、さらには鑑賞者自身との新たな関係性を見る者に意識させる。

和田直祐　《Elektroda #2》

左から 和田直祐《A graph #56》、《A graph #57》

Sanghoon Ahn 《there, you will meet me》

Sanghoon Ahn
《It's not as spicy as you might think》

そしてソウルのギャラリーGallery Chosun から出品されてるアン・サンフンもまた、似たような鑑賞体験を与える作家の一人だ。彼はアートフェアを除けば本展が日本で初の展示となる。

彼の絵画の制作プロセスは、まず無意識に削除してしまった iPhone の写真を一枚抜き出し、それを捨てられてしまった日常の一瞬としてキャンバスに具象的に描くことから始まる。その絵を作品の最初のレイヤーとし、その上に作家のジェスチャーを元にした線や色をレイヤーとして重ねていく。その結果、最初の写実的なイメージはさまざまな情報を付け加えながら抽象的なイメージへと移行していく。

作品タイトルは、絵が完成した後それを撮影し、 カメラ内で生成されたシリアル番号を Google 検索することで作品と関連性のある言葉を探し出す、というプロセスにより命名されている。

そしてもっとも特徴的なのは作品の展示方法だ。例えば《there, you will meet me》ではビニールに描かれた作品が 2 つ並べて展示されている。しかし長方形のビニールは 4 辺の 1 点のみがピンで壁に固定され、折り畳まれた状態なっており、そのため正面から見えるのはほとんど作品の裏側である。さらに《It's not as spicy as you might think》では、トレーシングペーパーに描かれた絵が、表面を内側にして筒状に丸められ、それを別の筒に入れて床に配置されている。作品の表面はその裏側に文字通り丸め込まれてその立場を取って代わられ、肝心な絵の描かれている面は裏側の透けを通じてしか見ることができない。

このような作品と展示方法は、作家が支持体（この場合、トレーシングペーパーやビニール）を単なる絵の具を載せる面としてではなく、物質的かつ三次元的な存在として捉えることから生まれている。彼の実践は、絵画に造形的な要素を加えると同時に、裏側から部分的に見える表面を通して、逆説的に隠された全体像を意識させる仕掛けを提供し、通常の絵画鑑賞とは異なる視覚体験を我々に与えている。

これら 3 名による作品は、それぞれ異なるアプローチから生まれたものであるものの、「私たちは何を見ているのか」という絵画における根本的な命題を投げかけるという点において呼応しているように見える。そのことはもちろん作家たちの制作における主要な要素ではないかもしれない。しかし展覧会という場で 3 名が組み合わさることでしか浮かび上がってこない視点であるとも言えるだろう。

そしてそれは場所や規模、運営スタイルの異なる 3 名のギャラリストたちが展覧会を通じて、新たなコラボレーションの形やそれによる化学反応生んでいる状況にどこか重なるようにも思える。筆者は、三者が空間的、時間的、文化的隔たり（Intervals）を新しいものが生まれる契機として肯定的に捉えようとしている様子を展示の中に垣間見ることができた。

※写真は全て筆者撮影

---

[i] 筆者による石橋高基氏と松本奈央子氏へのインタビューより

[ii] クラウス・メルケルも同様に「オキーフの花弁の絵のような象徴性や大きさとも対照的である。」と指摘する。（Merkel, Klaus. „petal / stair / day“. 2021. https://matsumotonaokoworks.com/home/textbyklausmerkel.html (参照 2024-12-5)）